

S. Iwamoto

神学と人文（大阪基督教短期大学紀要）第21集 1981年12月発行 抜刷

ジョン・ウェズリとその両親

岩本助成

ジョン・ウェズリとその両親

岩本助成

ジョン・ウェズリ (John Wesley, 1703—1791) と同時代の人物に、サミュエル・ジョンソン (Samuel Johnson, 1709—1784) がいる。名著『サミュエル・ジョンソン伝』を書いた J. ボズウェルは、この伝記の冒頭でこう述べている。「事実私としては、一人の人間の生涯の極めて重要な出来事を順を逐うて語りつつ、同時にその間へ彼がその都度私的に書き語り考えた事柄を点綴させて行く手法以上に、完璧な個人の伝記の書き方を考えることができない。読者はこれによっていわば彼が生きている姿を見、彼が実際にその生涯の個々の段階を進んで行くまま彼とともに『個々の場面を体験する』ことが可能になる、と私は信ずる。」⁽¹⁾ 筆者も及ばずながら、ボズウェルの手法にならって、ジョン・ウェズリの生涯の点描を始めたいと願う。ただその場合、どうしてもウェズリの父祖たちにさかのぼって叙述しなければならない。その理由は、かつてジョン・ウェズリ自身、こう記しているからである。「もし私が自伝を書いたとしたら、私の誕生以前のことから書き始めたにちがいないまい。」⁽²⁾ 又、晩年、弟チャールズ (1707—1788) への手紙で、自分たちの聖職者の家系を誇りとして、こう書いている。「私が知るかぎりでは、息子、父、祖父、高祖父の父 (atavus)、高祖父の祖父 (pritarvus)⁽³⁾ が連綿として、福音を、いや真の福音を宣べ伝えるというようなことは、過去数千年にわたってまづなかったと言うべきである。」⁽⁴⁾ 従って彼の誇る ウェズリ一族をその父祖たちにさかのぼって考察することにしたい。

1. ジョン・ウェズリの父系

ある伝承によれば、彼の父系は第11世紀半ばにまでさかのぼり得ると言う。1066年のヘスティングスの戦いで成人男子は死に絶え、幼ない子どもを抱えた未亡人はサマーセット州に移り住んだ。以来、一家の姓は、Weswe, Weslegh, Wellesleigh, Wellesley, Welsly などと綴られ、一度は誤まった発音からか、Westley と綴られたが、1539年以降は Wesley に定まった。⁽⁶⁾

曾祖父パーソロミュー (Bartholomew, 1600頃—1671) は、父 Herbert Wesley 卿 (下級貴族)、母 Elizabeth de Wellesley (アイルランド出身) から生まれ、長じて医学と神学を学んだ。1645年、イギリス南部の海岸に近いドーセット (Dorset) 州の寒村の教会に赴任した。背の低い司祭であったという。(ジョンも背が低かったが、それは父祖ゆずりのものであろうか。) パーソロミューは、フランスの敗走するチャールズ2世を捕え損なったと公言するほどの革命派いきでであった。王政復古後、聖職者の地位を追われたが、医師として生計を立てつつ伝道に励んだ。

ジョンの祖父の名は、ジョン・ウェズリ (本人が Wesley と綴った) と言い (1636頃—1670頃)、1651年、オックスフォードで神学と東洋諸言語を学んだ。大学副総長オーウェン (John Owen) という著名なピューリタンの助力により、1655年に文学士、1657年に文学修士となって父の許へ帰った。やがてメルコム・レギス (Melcombe Regis) で「分離派」に属し、巡回伝道者となった。1658年、ウィンターボーン・ホホワイトチャーチ (Winterbourne Whitechurch) のドーセットシャー (Dorsetshire) 村の牧会を託された。革命の時代には珍らしくはなかったというが、按手礼によらないで村民からの依頼による任職であった。着任から3年後、25歳の伝道者であった彼は、ブリストル司教ギルバート・アイアンサイド (Gilbert Ironside) の喚問をうける。後年、ジョン・ウェズリは喚問での祖父と司教との問答に深い関心を示した。⁽⁶⁾ これは問答を記した祖父のメモ

が伝えられて、ある非国教徒の編著に載せられ、偶然、彼の目にとまったものであった。A. S. Wood はこの問答を、すでに孫ジョン・ウェズリの歩む道が予示されていると重要視する。⁽⁷⁾ 喚問の直接のきっかけは、祈禱書使用拒否への訴えである。しかし、この問答は発展して、真の召命とは何か、聖職者の真の使命と権威とは何か、にまで至っている。司教に対して彼は、彼の伝道による回心者という成果を示している。秩序や制度がどうでもよいというのではない。ただ、何のための秩序であり制度であり接手であり伝道なのか。果実を持たぬ大樹に対し、果実をつけた小樹が精一杯の訴えをしているようである。Wood 同様、M. Schmidt も、この事件が後年のジョン・ウェズリのディレンマを暗示していると説く。⁽⁸⁾ 勿論、孫ジョンは主教よりの接手を受けた司祭であった。だが、教区外での説教や自由祈禱や信徒を補助伝道者として用いるという変則的方法を敢行した。にもかかわらず、彼には祖父になかった国教会への忠誠と敬愛とが横溢していた。国教会聖職者として生涯を全うしたこの人物の血の中に、脈脈として続いていたピューリタンの精神、この両者の交錯と混合の過程を論じることは避け、今はただこの事実のみを示しておきたい。

祖父ジョン・ウェズリは、あらゆる抑圧と受難にも屈せず巡回伝道などに励んだが、34歳の若さでその父バーソロミューに先立って死んだ。多くの遺児のうち、無事に成育したのはマシューとサミュエルだけであった。マシューは医師となったが、このサミュエルがジョン・ウェズリの父サミュエル (Samuel, 1662—1735) その人であり、一家の辛酸のどん底での誕生であった。

2. ジョン・ウェズリの母系

ここで目を転じて、ジョン・ウェズリの母系を調べてみよう。母方アンズリ家はイングランド中央部のノッティンガムシャー州の出身である。曾祖父ジョン・ホワイト (John White) はピューリタンで著名な弁護士であ

り、諸事件で活躍した人物であった。祖父サミュエル・アンズリ (Samuel Annesley, 1620頃—1696) は、リチャード・バックスター (Richard Baxter) の親友でもあった。著名な非国教会派牧師で、「非国教会派のパウロ」と呼ばれた。富農の一人息子として生まれたが、長じて司祭となり、「統一令」(Act of Uniformity, 1662年) に反し、『統一祈禱書』を受け入れなかった。そのため2,000人に及ぶ他のピューリタンの聖職者とともに司祭職を奪われた人物である。

アンズリは ウェズリ一家のような貧しさには追われなかったが、苦難の道歩んだ。4歳で父を失い、15歳でオックスフォード大学クィーンズ・カレッジに入学、22歳で司祭としての接手をうけた。1652年にロンドンに出てきた(因みに、当時のイングランドとウェールズの推定総人口が540万程度、ロンドンの人口も50万にはるかに満たなかったらしい。)前述の追放後もロンドンに留り、800名から成る最大の長老派教会を組織した。1672年には公認をとりつけ、1694年に非国教会最初の接手礼を執行するなど、実に中心的存在として国教会との戦いの先頭に立った。

アンズリは又、大家族の家長でもあった。ある質問に答えて子女の数を、「2ダース、つまり24人。又は、100の $\frac{1}{4}$ 、つまり25人。」と答えている。どちらも正解である。先妻の子1人と後妻の子24人で、後者だけだと24人、合計すれば25人であった。ジョン・ウェズリの母ズンナは後妻の24番目の子ども、末娘であった。

以上、述べてきたジョン・ウェズリの父方及び母方の家系の特色は、一目瞭然であると言えよう。第1に、その非国教会徒としての信仰と行動の一貫性、第2に、その事実から起ってきた苦難と戦いに耐える不屈の精神、第3に、徹底した宣教活動、第4に、牧会する対象、特に貧しい人々への愛と連帯、などである。

にもかかわらず、我らは、このような家庭環境に生みだされたジョン・ウェズリの両親が、こともあろうに、ともに、父祖たちがあれほどの抵抗を示した国教会へと大転換をはかった事実に対し、啞然とせざるを得ない

のである。では、この間の事情をも含め、ジョン・ウェズリの両親をそれぞれに素描してみよう。

3. 父サミュエル

サミュエルの父は、彼が8歳の時に死去した。彼はその後、ドーチェスター (Dorchester) の無月謝学校に通い、ピューリタンの教育をうけた。成績優秀の彼は非国教徒の友人たちの助けでロンドンの非国教徒専門学校 (academy) へ、更にストーク・ニューイングトン (Stoke Newington) にある、モートン (C. Morton, 彼は後年、ハーヴァード大学副総長となる。サミュエルは終生、彼への尊敬の念を変えなかった) が校長をしていた専門学校へ入った。一大変化が起ったのはこの時期であり、サミュエルは20歳をすぎたばかりであった。

後年のジョンの叙述によれば、父の思想的変化は次のようにして起った。「いくつかのひどい悪口が非国教徒に対して記されたので、注目すべき秀才青年サミュエル・ウェズリが、弁明のために選ばれた。そのため、彼は一連の読書を命じられ、この読書がまもなく、当初の予定とは別の結果を生じたのである。望み通りの答を書くどころか、彼自身、自分の見解を改める理由を見つけたのである。そう考えて彼は実際に、非国教徒であることを放棄し、国教会に属する決意をした。」⁽⁹⁾

非国教徒の母らにこの決意を打ち明け得ぬまま、彼は朝早くひそかに徒歩でオックスフォードにむかい、エクセター・カレッジ (Exeter College) の特待免費生として学びを始めた。貧しさのどん底にありながら、ある日、公園に横たわる貧しい姉弟に同情し、持ち金を皆、与えてしまったという逸話が残っている。最近、オックスフォード大学ポドリーアン・ライブラリィで発見された1692年のサミュエルの手紙に記されていたのである。⁽¹⁰⁾ 血気盛んな改宗者サミュエルは、当時のオックスフォードに支配的であった、いわゆる「トーリー-高教会主義的傾向」の感化をうけ、生

涯、その立場の熱烈な信奉者として活動した。1688年、ロチェスター主教から執事の接手を受け、翌年、ロンドン主教から司祭の接手礼を受けた。それ以前の1682年、ロンドンでの友人の結婚式に出席した彼は、そこでアンズリー一家と知り合う。そして1688年、スザンナ (Susanna, 1669—1742) と結婚した。サミュエル26歳、スザンナ19歳の秋であった。結婚後1年半はロンドンで過したが、1690年長男サミュエルが誕生した。その頃の年俵30ポンド、他に文筆で同額を得ていたという。1697年、メアリへの忠誠をめでられ与えられた沼沢地帯エプワース (Epworth) 地区の聖職禄を受けて赴任した。彼らには19人の子どもが与えられた (うち、3組の双子あり)。9人は幼くして死んだが3男7女が育った。死病と貧しさにさらされていた時代にあって、この数は立派な養育の賜物と言わざるを得ない。(王宮で育てたアン女王 (1702—1714在位) さえ、17人の子女を幼くして皆、失ってしまったのであるから。) ジョンは1703年6月28日 (新暦)、第15子として生をうけたのであった。

ここで、先に述べたサミュエルの「トーリー高教会主義」的立場を少し説明しておこう。サミュエルなど多くの「高教会人」⁽¹⁾が、当時、ウィリアムとメアリーに「臣従の誓い」をしたのは、何も1688年の名誉革命体制を認めたからではなかった。カルヴィニストのウィリアムを心から支持できず、逃亡したジェイムズに対する王権神授的服従は「信仰自由宣言」などで崩されてしまって抛りどころとできなかったからである。そこへもってきて、エプワースの特殊事情が加わった。そこは当時、人口2,000人ほどの市場町で、周囲を川に囲まれた干拓地であった。「アクゾルムの島」と呼ばれていたことから、その環境がうかがえる。干拓事業が住民無視の形で行われたせいも、ここの住民には反体制的傾向が強かった。そのただ中へ、熱烈な王党派が赴任したのである。非国教徒との確執に加えて、律義なトーリー派戦士サミュエルは、ウィッグ派との政争に巻きこまれ、いくつかの事件をひきおこすこととなった。

しかし、サミュエルの強敵は家庭の外ばかりでなく、実は内にもいたの

である。妻スザンナは王権神授説に堅く立ってジェイムズに忠誠を誓うゆえに、いわゆる「臣従の誓い」を拒否した、「臣従拒誓者」(Non-Jurors)のグループに属していた。夫婦は互いの立場を決してゆづらなかつた。そして決裂は1701年、ウィリアムの死とアンの即位の前年におこつた。サミュエルは主教管区選出議員として、会議出席のためにロンドンへ赴いたが、そのままそこに滞在してしまう。留守の教区を守り子女を養育しつつ、スザンナはいろんなことを考えた。彼女の考えは変らなかつたものの、この別居と不和に悩んだ手紙も、近年、発見されている。だが、この問題も翌年のウィリアムの死によって、急転直下、解決へむかつた。アン女王の即位は、サミュエルとスザンナの政治的対立の原因を除いてしまった。サミュエルはエプワースに帰り、翌年に誕生したのがジョン・ウヰズリその人であると言う次第であつた。

サミュエルの高教会主義がウィリアム・ロード(W. Laud)の系列に属するものでなく、ランセロット・アンドルーズ(L. Andrewes)の系列に属するものであると、M. Schmidtは主張し、⁽¹²⁾ 野呂芳男はこの見解を支持する。⁽¹³⁾ つまり、サミュエルは、ロード派的伝統のように、聖職制度や教会法規を強調する立場をとらず、アンドルーズ派的伝統のように、初代教会の伝統との連続性、キリスト教会全体との内的一致に、国教会の公同性を信じていたのだと言う。Woodも述べるように、サミュエルの高教会主義が教理的なものでも聖職制度に関するものでもなく、多分に政治的(教会政治を含む)なものであつたことは否めない。⁽¹⁴⁾ しかし、それがどのような流れに属していたかについては、より綿密な高教会アルミニアンイズムに対する史的検討が必要であらう。⁽¹⁵⁾

ともすれば、母スザンナとのみ結びつける傾向を是正し、ジョン・ウヰズリと父サミュエルとの関係を正しく指摘したG. Ruppの好論文がある。⁽¹⁶⁾ その指摘の中から、中心点だと思える2,3の点をとり上げてみよう。

第1は、「内的宗教」(inward religion)である。1735年4月、39年間

の牧会生活と文筆活動、刑務所伝道ほかにその生命を燃やしつくしたサミュエルは、72歳で死の床についていた。父の最期を看取ったジョンに対し、父は「内なる証 (the inward witness) だ、息子よ、内なる証だ。これが証、キリスト教のもっとも力強い証だ。」ということばをのこした。又、チャールズには、自分が見ることのできなかつた信仰復興を、お前は見るに違いないと励ましのことばを与えた。内的宗教とは、形式を拒否するものでなく、あらゆる形での形式主義を打破し、宗教の内的生命を体験せしめるものである。又、聖霊の証、内的な証とは、神の一方的な恵みの業であり同時にこの身体に与えられる業である。3人の息子をはじめ子どもたちは、各々その特色を異にしつつも、父の「内的宗教」を継承し、それを今日に至るまで流れる蕩蕩たる大河の如くにした。

第2に、サミュエルは文筆に親しんで大作『ヨブ記』（これは 献呈の辞どおりに、ジョンの手からカロライン女王へ贈られた）や『洗礼論』などを著わし、又、「エプワースの詩人」を自称し詩作に励んだ。息子たちに与えられた文筆の贈物は、彼らの父母からゆずられた素質であろう。特に、サミュエルの『若き聖職者への助言』(Advice to a Young Clergyman) は、興味深い著作である。¹⁷⁾ 後年、ジョンはこれをもとにして“Address to the Clergy”を出版した。サミュエルは牧師の学びについて、聖書学と聖書語学を中心とすべきことを説き、更に学びは、論理学、歴史学、法律、薬学、自然哲学と経験哲学、年代学、地理学、数学、詩学や音楽と多方面に及ぶべきことを助言している。息子たちが多様性に富み、知的探究心に満ちていた謎は、父サミュエルの姿で解けよう。サミュエル自身の経験では、着任3カ年半は聖書学と教父研究に没頭し（ただ、彼の教父研究はカロライン神学者やあるピューリタンたちに劣る。たとえば彼はアウグスティヌスを深く読まなかった。）、その後は「すべての本が有益だとは思わないが」と注釈しつつ、当時の国教徒及びピューリタンのものを学んだ。母スザンナが愛読したと伝えられる多くの書物、たとえばパスカルや『イミタティオ・クリスティ』なども、実はサミュエルの書棚

からのものである。彼はすぐれた批評とともに、それらを彼女に紹介した。文才と絶え間のない学びが、彼自らを益したばかりでなく、妻や子どもたちにも大きな影響を与えたのである。

第3に、父と子との間に交わされた手紙について触れたい。新しい『ウェズリ全集』オックスフォード版、『書簡集I, 1721—1739』が出版された。⁽⁴⁸⁾ その内容をめぐる詳細な研究は後日にゆずるとして、サミュエルはジョンたちに実に心あたたまる手紙を書いている。1724年から父の死(1735年)までの間に、サミュエルとジョンの間には少くとも120通の手紙がやりとりされた。手紙の数からいえば、更に数年間、長生きした母との手紙のやりとりの数に等しいものである！ しかもジョンは、母に対して用いなかった尊敬をこめた用語を使っている。これらのことから、サミュエルとジョンとの文通の再評価が迫られている。父は怒りをもってジョンに接したことが殆んどなかった。母スザンナに優るとも劣らぬ霊的指導を、幼くして家を離れて学舎に入ったジョンたちのために、手紙を用いて行っていたのである。

第4に、ジョンたちの霊的活動や宣教活動を指導したのも父であった。オックスフォードにおける“Holy Club”を激励し、スザンナとともに海外宣教の幻を息子たちに与えた。自らも入獄の苦しみを経験したので、囚人伝道を奨励し、後の刑務所改良運動への端緒をひらいた。

もちろん、サミュエルも短所や欠点と無縁な人物ではない。政争に入り込みすぎた点、それが時代的特色(バイロンさえ、赤子の死の知らせを受けた時、マンチェスターの自宅へ帰らなかったという。当時の夫たちの気風をうかがわせる)とはいえ、別居して教会と家庭を放置した点などは、とがめなしとはしない。しかし、あらゆる面で未完成で荒削りな彫刻を連想させるサミュエルではあったが、その内的宗教は長男サミュエルをはじめとして、ジョンやチャールズの全生涯において偉大な完成の美を現わした。

父の死後7年経って再びエプワースを訪れたジョンは、説教を禁止され

てしまった。夕6時、集まった大会衆を相手に、ジョンは教会の庭にある父の墓石の上に立ち、それを高壇として「神の国は、義と平和と聖霊における喜び！」と叫んだ。⁽¹⁹⁾ ウェズリー一家の面目躍如たるものがあると言えるよう。

ジョン・ウェズリーの父サミュエルについて述べてきたが、以下において、F. Baker の研究⁽²⁰⁾ を参考にしながら、母スザンナについて述べることにしよう。

4. 母スザンナ

スザンナは、幼時より意志の強い、独立心に富んだ学問好きな子どもであった。フランス語に長じ、哲学、文学、宗教に興味をもった。父祖以来のピューリタンの伝統に育ち、非国教会徒の出入りする環境で知的訓練を受けた。その彼女がなぜ13歳もの幼なさで、突如、国教会へ転じる決心をしたのであろうか。まず考えられることは、国教会派の著作や人物に接し、その総合的な美しさに惹かれたということである。秩序ある礼拝、教会的伝統の一貫性、穩健な信仰の立場などが彼女の心をとらえた。この決意を打ち明けられたとき、父アンズリ博士は表情を変えなかったという。娘の性格を知る彼は、それが単なる思いつきではなく熟慮を重ねた末のことであることと知っていた。しかし、なお一抹の寂しさを禁じ得なかったことであろう。ただ、アンズリの立場が分離派（会衆派）に属する急進的なものでなく、穩健な長老派のものであったことも覚えておくべきであろう。ともあれ、スザンナは国教会徒としての道を歩み出したばかりでなく、その聖職者の妻としての道をも選んだのである。

上述の Baker 論文から、筆者は特に3点をとりあげてスザンナの横顔を描きたい。第1点は、彼女が靈想（devotion）の人であったということにある。彼女は朝、昼、夕の3回、聖書を抱いて退修のひとときをもった。聖書とともに靈的な糧となる書物も愛読した。その範囲は広くてロー

マ・カトリック派からルター派敬虔主義者 シュペーナー やフランケ のもの、古典をはじめ国教会派やピューリタンの諸著作に及んだ。しばらくの読書に続いて祈りと黙想のひとときがあり、又、内省と自己吟味の時をもった。ここで特色深いのは、彼女が「方法」(method)を大切にした点にある。精神主義的傾向を否定し、精神重視で方法にとらわれないといったやり方では、永続性がないというのが持論であった。計画などが不十分だったり、方法が確立していないとすぐに行き詰ってしまう。従って霊想のひとときで得たものは、すべて記録された。これが日誌の形をとる。ジョンには浩瀚な『日記』や『日誌』があり、又、チャールズの『日記』ものこされているが、そのルーツをたどると母の霊想生活に至るのである。「方法」の重視で思いおこすのは、彼女が「恵みの手段」を重視し、聖書通読や祈り、初代教会への模倣、霊想書やさんびだけでなく、礼拝(聖餐)や断食の厳守、伝道や立証の実践を高調したことである。これらのことは「臣従拒誓者」グループに見られる傾向であるが、スザンナの場合は、真剣な生活化を伴っていた。そしてこの生活化は、そのままオックスフォードの「神聖クラブ」において受け継がれた。

第2に、生活訓練を挙げたい。かつて、ジョンの質問に答えてスザンナはこう答えている。「私の教育的手段について、何かを認めようとすることは、私のもっとも好まないことです。……自分の子どもたちの魂を救う希望を第1の目的として……及ばずながら、不成功ながら、教育し続けてきました。」と。この基本点は重要である。それは単なる行儀作法のためのしつけではなく、「まず神の国と神の義とを求め」るためのしつけであった。

具体的には、①ものが言えるようになると、主の祈りが教えられ起床時と就床時に祈ること、②少し成長すると、両親や友人のための祈りが加えられる、③聖句の暗誦と信仰問答へと進んだ。長男サミュエルは4歳まで言葉を発さず、両親をやきもきさせたが、5歳で一度にしゃべりだした。アルファベット学習後は、創世記第1章から読ませた。3時間単位で10節

ほど進んだ。夫のサミュエルが「こんなのろまな子に、なぜ20回もくりかえし教えるのか」と叱ると、スザンナは平然と「19回では足りないからです」と答えたという。④主の日と他の日々との区別を教え、⑤家庭礼拝の厳守、⑥神の名を濫用したり、呪いことばや不敬虔なことばを用いないこと、使用人にも丁寧なことば使いをすること、をしつけた。

それぞれの子どもに対し、曜日を決めて一対一で話し合う時間をもったことは有名である。信仰上のしつけは生活習慣の訓練にまで及んだ。①規則正しい生活習慣、②規則正しい睡眠時間、③幼児期に行なう徹底したしつけ。従って成長してくると、特にやかましく言う必要がなかった。④間食の禁止、⑤母とともに食事すること、⑥食物の好き嫌いをなくす、⑦泣いておどしてもそれに応じない、⑧召使いにも「どうぞ……して下さい」と言わせる、⑨罰を恐れて偽わりを言うことを防ぐため、あやまったらこらしめを与えない、⑩改めたら、過去の誤まちをくりかえして責めない、⑪従順や克己をほめる、⑫他人のための行為は、たとえ失敗してもほめること、よりよく出来るように指導する、⑬他人の所有物は、それがピン1つでも許可なしに用いない、⑭約束したことは必ず実行する、⑮女子教育を軽んじない。当時の人々のやり方と異なり、女子にもまず読み書きを教え、それから仕事を教えた。⑯勝負事を禁じ、スポーツを奨励する、⑰貧しさの中にも明るさを保つことを教えた。

以上のような生活訓練は、進歩的なジョン・ロック (John Locke) の『人間知性論』や『教育に関する考察』をただ模倣したものではない。この理想的なしつけも、さまざまな失敗をのりこえて出てきたものである。一生を支配する幼時の徹底的なしつけ、我意の克服、個人的面談の大切さ、きびしさとおたたかさの調和、習慣の重要性、⁽²¹⁾ 等々、今日においても最も重要な問題として教育界で論じられている内容である。

大家族の中での家庭教育も、結果的に見ると、男児の場合によりよく、女兒の場合に失敗が多かったようである。しかし育児に追われつつ書いた日誌には、このような主旨のことが記されていたと言う。——多くの子ど

もの教育は難しいものでした。心身両面で、くりかえししつけていかねばならないでしょう。しかも私にとっては、他の多くの人々で面倒を見る以上に、榮譽ある仕事です！ 収穫のすばらしさは育てる苦勞にまさったものです。主のみまえに立った時、こう申しましょう。「主よ、ここにあなたが与えてくださった子どもたちがいます。恵みによって私につまずく者はなく、しつけに逆った者もなく、真の宗教と生き方を学んでくれました！」と。――

Baker は第3に、彼女を「メソジスト運動の母」と位置づけている。1735年、夫の死とともにエプワースを去り、長男サミュエルとともに住んだ。1739年、彼がわずか4時間の患いで急死したので、ロンドンにあるジョンの住いに来て、召されるまでの3カ年をそこで過した。スザンナの晩年の5カ年は、ちょうど、メソジスト信仰復興運動の勃興期に当たった。夫サミュエルがその目で見ることのできなかつたものを、彼女はその目で見つめた。スザンナは過去への追憶に生きず、変わり行く現在の状況を直視しながら、ジョンやチャールズに適切な助言と指導を与えた。長男サミュエルが弟たちの運動に批判的であったことから（驚くなかれ、ジョンが兄サミュエルと交わした手紙は200通を越える。）、一時期、息子たちを誤解していたこともあった。しかし、彼らの運動のモットーが、完全、全き愛、聖靈の確証、愛によって働く信仰など、自らの信仰と一致することを知ってから、積極的にこの運動を助けた。

ある信徒（Thomas Maxfield）の説教を、信徒ゆえに斥けようとしたとき、この青年の説教をきいていたスザンナは、「まず、聞いてから斥けよ」とジョンに迫った。ここに、メソジスト運動における積極的な信徒運動の開始がある。スザンナの貢献は大きい。彼女は進んで野外集会にも連なつた。

彼女は生涯、病弱であつたらしい。夫サミュエルの言うには、彼女は1年の半ばは床につき勝ちであつた。過勞と栄養不足によるものであろうか。死の床でもものが言えなくなる少し前に言い残した彼女の最後の願い

は、次のようなものであった。「子どもたちよ、私が解き放たれたら、すぐに神をさんびする詩篇を歌ってください。」チャールズの作になる墓碑銘は、以下のことばを刻んでいる。⁽²²⁾

スザンナ・ウェズリ夫人ここに眠る。
サミュエル・アンズリ博士の末娘にして、
同家の最後の人。

復活の信仰と希望にあふれ
天上のすまいをあこがれ、
担いし苦難の十字架、今や栄冠とかえられて、
クリスチャンたりし彼女の肉体
ここに休む。

うち続く苦難と悲劇の中に
恐れと悲しみの長き夜を戦い祈りし70年、
げに苦悩の娘なりき。

時しも御父は御子をくだし
かのパンくずを拾わせたまえば
彼女は罪とがの赦しを知り、
汝が御国の備えは成れりとの
恵みのささやきを聞けり。

起きよ、わが愛するものよ、
来りて天上の交わりに入れと
召したもう主の御声さやかにきこゆ。
「我、従いまつらん」と

いまわの際にもその顔をあげて応えつつ、
 主に従う子羊のごと
 従い行きて眠りしなり。

Maldwyn Edwards と言えば、ウェズリ 研究者として著名な人物である。⁽²³⁾ 死後出版された My dear sister: The story of John Wesley and the Women in his life, Manchester: Penwork, 1980, において、Edwards は、ウェズリ 伝記者や研究者にさえ見られる、ウェズリ 母子への偏見を批判している。スザンナにジョンが愛着し過ぎたと見る人々に対し、ジョンがエプワースの司祭館を後にしてロンドンへ学びのために向ったのは、彼が僅か10歳の時であった事実を示している。過保護な母親が、このような幼い子どもを手離すであろうか。又、子も旅立って行くであろうか。しかも彼がその生涯で母とともに住んだのは、父の副牧師時代と母の最晩年という僅かな年月のみであった。従って敬愛する母とは、文通の形をとらざるを得ないが、これとて父との文通と殆んど同数であった点を見落している。ジョンにはこの他、兄弟姉妹それぞれへの多くの手紙があることも忘れてはならない。

もっとも通俗的な見方は、母に理想的女性を見たため、彼自身は、不幸な結婚生活に終わったのではないかという見方である。これも事実関係を十分に検討しないと、単なる臆測の域を出ないこととなる。Edwards は、ジョンがその生涯において出会った一人一人の女性を検討して貴重な研究を残した。ジョン・ウェズリの伝道生活の実態、妻となったバジール夫人 (Mrs. Mary Vazeille) の人となり、彼らの生活ぶり、別居に至る過程を資料研究によって検討しないかぎり、性急な仮説は禁物であろう。まして母の影響を、「この47歳の伝道に没頭する 男の結婚」にまで見るのは、未成熟な男ならともかく、ジョン・ウェズリのような人物の場合には、不適当な見方というべきであろう。

5. ある象徴的な出来事、「炎から取り出された燃えさし」

人は幼児期に、その人の一生を象徴するような体験をしているものだと言われる。ジョン・ウェズリの場合、このことは明瞭に言い得る。1709年2月9日深夜、(これが初めてではなかったが放火らしい)司祭館から出火した。家族は熟睡していたが、焰をくぐり抜けて避難した。その時、燃えさかる窓辺に立つジョン(5歳)が見えた。彼だけが逃げおくれたのである。父は焰の中に何度もとび込もうとするが失敗し、家族を呼び寄せて愛児を神の御手にゆだねる祈りをささげた。

梯子が間に合わぬと知ったある男が、2階までの肩車による人梯子を提案し、2度目に成功してジョンを救出した。すべてを失った貧しい司祭一家であったが、ジョンの生命が助けられたことを知り、涙とともに感謝の祈りをささげた。この夜以来父母の心中にジョンが特別な使命を与えられており、そのために九死に一生を得る体験をさせられたのである、との印象が刻まれた。当人にとっては、この自覚は更に強烈であった。ジョンはゼカリヤ3:2(又は、アモス4:11)の「炎の中から取り出された燃えさし」との恵みの自覚を強めた。1742年(39歳)の肖像画にも、自らこの聖句を書き込んだ。この事件後、ちょうど40年の1750年2月9日(金)の『日記』には、こう記されている。⁽²⁴⁾

「私たちは礼拝所で、楽しい深夜祈禱会を開いた。11時頃、私は40年前のこの日この時、炎の中から自分が取り出されたことを思い出したので、説教を中断し、あのすばらしい摂理について手短かに話した。すると讚美と感謝の聲が湧き上がった。私たちの喜びは、主の前に大きかった。」

又、1753年11月26日(月)の『日記』を見ると、肺を患っていた彼は死を予期し、死後の仰仰しい賛辞を防ぐため、自らの墓碑銘を記している。

「ジョン・ウェズリここに眠る。

炎の中から取り出された燃えさし

51歳で結核に倒る。

負債を返すと残金は10ポンド余り。神よ、汝にふさわしからぬこのしもべにみ恵みをくだしたまえ！」

12月2日（日）のチャールズの『日記』にも同じ碑文が記されており、兄からこの墓碑銘を依頼され、ジョン・ウェズリ夫人との和解を願われたとある。⁽²⁵⁾

「炎の中から取り出された燃えさし」にすぎぬとの自覚は、深く恵みをたたえ、自らを謙虚に、土の器と内省している証である。だが、この燃えさしこそ、全英国のみならず、やがて全世界に神の栄光を輝かす偉大なる燃えさしだったのである。

6. 家庭宗教の訴え——結びにかえて——

ジョン・ウェズリとその両親についての論述を終るに際し、「家庭宗教について」という彼の説教から、その一部を引用して拙稿の結びとしたい。

「……逆に、彼らがこの決意を抱かず、家庭宗教を軽視して次の世代を顧みなかったとしたら、どのような結果を招くでしょうか。今日の宗教復興は、またたく間に消滅してしまわないでしょうか。それはある歴史家が、これから繁栄する筈であったローマ帝国に言及して、*res unis aetatis*（一世代だけで終わってしまう出来事）と述べたのと、全く同じ事にならないでしょうか。それは、『宗教復興は一世代以上は続かぬもの』と言った、ルターの憂うつげな言葉を裏づけてしまわないでしょうか。一世代とは、（彼自身の説明では）30年間のことです。けれども、神をほめたたえましょう。私たちの信仰復興に関するかぎり、この言葉は当てはまりません。1729年に始まり、すでに50年以上も続いているからです。

私たちはすでに、善人なのにこの決意をとらなかったため、不幸な結末を招いた例を見てきたではありませんか。この時代においてさえ、敬虔な

両親から主を知らない世代、心に愛を抱かず目に畏れを覚えない世代がいるのではないかとおっしゃいますか。……さて、敬虔な方法で教育された子どもたちにも、このような事は起り得ないとは申せません。しかし、ごく稀な例のみです。少数の例には出合いましたが、決して多くはありませんでした。子どもたちの悪は、普通、両親の養育失敗か軽視のどちらかによるものです。普遍的原則と言えないまでも（まま、例外があるものです）、一般的な原則は、『子どもたちを、その歩むべき道へと訓育せよ。さらば、成人したる時もその道を離れじ。』です。……理性に従い、神のみことばに従いなさい。世人の流行や習慣を追ってはなりません。『自ら潔きを守れ』。他の人々が何をしようとも、あなたと家族とは、『救主なる神の教えを飾る』ことに励みなさい。あなたも、同労の妻も、子どもたちも、しもべたちも皆、主の側に立ちなさい。喜び勇んで一つのくびきを負い合い、主のすべての戒めとみことばとを守りながら歩みなさい。あなたがたみんなの者が、『おのおの、己が労にしたがいてその賞を得る』その時まで！』。⁽²⁶⁾

(注)

- (1) J. ボズウェル、『サミュエル・ジョンソン伝Ⅰ』、中野好之訳、東京、みすず書房、1981年、4頁。
- (2) A. Skevington Wood, The Burning Heart: John Wesley, Evangelist, Exeter: Paternoster, 1967, p. 19 に記されている、Adam Clarke, Memoirs of the Wesley Family (1823), vol. I, p. 94 からの引用文による。
- (3) priavus は、「母方の父祖」とも訳せる。
- (4) The Letters of the Rev. John Wesley, A. M., ed. J. Telford, London: Epworth, 1931, vol. V, p. 76.
- (5) Martin Schmidt, John Wesley: A Theological Biography (ET), New York: Abingdon, 1962, vol. I, p.35.
- (6) The Journal of the Rev. John Wesley, A. M., ed. N. Curnock, London: Epworth, 1914, vol. V, pp. 120—124.
- (7) A. Skevington Wood, op. cit., p. 21 ff.

- (8) Martin Schmidt, op. cit., p. 38.
- (9) John S. Simon, John Wesley and the Religious Societies, London: Epworth, 1921, p. 48, 及び, V. H. H. Green, The Young Mr. Wesley: A Study of John Wesley and Oxford, London: Arnold, 1961, p. 42.
- (10) John A. Newton, Susanna Wesley and the Puritan Tradition in Methodism, London: Epworth, 1968, p. 79.
- (11) 「高教会」という用語を用いる時の注意について A. Skevington Wood, op. cit., p. 27 を見よ。なお, 「アングリカン」は第19世紀の用語なので, 第18世紀については用いない方がよい。E. Gordon Rupp, “Son of Samuel: John Wesley, Church of England Man”, The Place of Wesley in the Christian tradition, ed. K. E. Rowe, Metuchen, N. J.: Scarecrow Press, 1976, p. 62 を見よ。
- (12) M. Schmidt, op. cit., p. 41.
- (13) 野呂芳男, 『ウェスレーの生涯と神学』, 東京, 日基教団出版局, 1975年, 59頁。
- (14) A. Skevington Wood, op. cit., p. 27.
- (15) 岸田紀, 『ジョン・ウェズリ研究』, 京都, ミネルヴァ書房, 1977年, 78頁以下。
- (16) E. Gordon Rupp, op. cit., pp. 39—66.
- (17) Ibid., p. 63, n. 6.
- (18) The Works of John Wesley, ed. Frank Baker, Oxford: Clarendon Press, 1980, vol. XXV (Letters I, 1721—1739).
- (19) Journal, vol. III, p. 19.
- (20) Frank Baker, “Salute to Susanna”, Methodist History, vol. 7, No. 3, Apr. 1969, pp. 3—12.
- (21) 稲垣良典『習慣の哲学』, 東京, 創文社, 1981年を参照。ロックのみならず, ウェズリの習慣論との学問的対話が, 将来, 望まれる。
- (22) Journal, vol. III, pp. 31—32.
- (23) 本稿と関係ある著作としては, Family Circle, London: Epworth, 1949や The Astonishing Youth, London: Epworth, 1959などがある。
- (24) Journal, vol. III, pp. 453—454.
- (25) The Journal of The Rev. Charles Wesley, M. A., ed. T. Jackson, London: Mason, vol. II, p. 97.
- (26) The Works of the Rev. John Wesley, M. A., ed. T. Jackson, London: Mason, vol. VII, pp. 76—86.

〔注, 以外の主要参考文献〕

- Andrews, S., Methodism and Society, London: Longmans, 1970, pp. 37—55.
- Baker, F., John Wesley and the Church of England, London: Epworth, 1970,
(最も標準的なもの)。
- Cragg, G. R., The Church and the Age of Reason, Middlesex: Penguin Books,
1960, pp. 141—156.
- Davies, R. E., Methodism, Middlesex: Penguin Books, 1963, chapters, 3, 4 & 5.
- Davies, R. E., and Rupp, E. G. (eds.), A History of the Methodist Church in
Great Britain, London: Epworth, 1965, vol. I, Introduction, chapters 2 &
4, (すぐれた概説)。
- Fitchett, W. H., Wesley and His Century, London: Smith, Elder, 1906.
- Green, V. H. H., John Wesley, London: Nelson, 1964, (簡潔な評伝)。
- Harrison, G. E., Son to Susanna, London: Nicholson & Watson, 1937.
- Outler, A. C. (ed.), John Wesley, New York: Oxford Univ. Press, 1964.
- Southey, R., The Life of Wesley and the Rise and Progress of Methodism, 2
vols., London: Longmans, 1846.
- Sykes, N., The English Religious Tradition, London: S. C. M., 1953, ch. 16,
(すぐれた要約)。
- Tyerman, L., The Life and Times of the Rev. John Wesley, M. A., 3 vols., London:
Hodder, 1870—71.
- Wood, A. Skevington, The Inextinguishable Blaze, London: Paternoster, 1960.